

初期シカゴ学派社会学におけるアーネスト・バージェスの 研究指導について ——職業社会学の萌芽

鎌 田 大 資*

How Did Ernest Burgess Direct the Research of the Early Chicago School of Sociology?: The Beginning of the Sociology of Occupations

Daisuke KAMADA

社会調査こそ、現代の社会学の最重要な使命であり、おおまかに量的社会調査と質的社会調査に分かれた二通りのやり方を、現在おこなわれている形にしあげ、継続的に実施するようになったこと自体が、初期シカゴ学派社会学の貢献かつ達成だと論者は考えている。

19世紀の社会学は、名前を与えられたばかりの思弁的な学問分野に過ぎなかった。社会的(social)という形容詞も社交や交際にかかわる長くつづいた語義から、一人、二人の小集団と国民国家に準ずる規模の人間集団のあいだで、いろいろなサイズの人間の集まり全般を指ししめす言葉として、その意味自体に新たな側面が付加され、変質した。単なる町の人々の集まりではなく、具体的な現実の相互作用のなかに観察される「社会」に関するものへと意義が変化した。その変容の中心にいて生涯を、自身の研究と周囲の研究者集団のプロデュースとプロモーションにささげたのが、アーネスト・バージェスである。そして、50歳という成熟した年齢でシカゴ大学社会学部とかかわりを持ち、シカゴ・モノグラフとして結実する一連の社会調査プロジェクトをバージェスとともに指導し、人間生態学という名称や考え方の枠組、『科学としての社会学入門』(Park & Burgess [1921] 1924)という重要な教科書の作成に、大きな役割を果たしたのがロバート・パークである¹。

初期シカゴ学派社会学の学説史研究には、すでにかんがりの蓄積があるものの、1916年にシカゴ大学に職を得て66年に逝去するまで、50年の歳月を同大学と強いかわりを持ちつつ過ごしたアーネスト・バージェスの伝記資料が欠落しているため、彼と共同研究者ロバート・パークがおこなった研究指導の実態については、他の研究者の回想や自伝的言及からわずかな痕跡を拾い集めて再現するほかに、知るすべはない。バージェスに関する知的評価をまとめるには未だ重要情報が不足し、神話破りのときを待つ常識的な通念や雲をつかむような推測に頼る局面が多くなる。しかし、バージェスの博士論文の検討と、シカゴ大学大学院を離れてカンザス、オハイオ州の三つの大学を渡りあるきつつ実施されたソーシャル・サーベイを検討することで、従来の2次文献では扱われていない彼の研究指導上のテーマが明らかになるように思われる。本稿では、博士論文とソーシャル・サーベイという近年、新たに検討されはじめた情報源と、

*人間関係学科 准教授

以前から考察されてきた最初期のシカゴ・モノグラフの著者、ネルス・アンダーソンの自伝的回想から、パークとバージェスによる研究指導、最終的に作成されたアンダーソンの著書『ホーボー』(Anderson 1923=1999-2000) 出版に至る二人の指導者の関与を振りかえり、特にバージェスによる指導の内容を抽出して、その特徴の一側面を指摘する。

そうした検討の準備として、次節ではシカゴ大学着任まえのパークとバージェスの経歴、業績をまず概観する。

1. パークとバージェスの前シカゴ期

パークはミシガン大学で学士号(1887年)、ハーバード大学で修士号(1889年)を取得後、新聞記者となり(1887-1893年)、資金をためてドイツに留学し、ジンメルなどの指導を受け、群衆論の再検討によりハイデルベルク大学で博士号を取得する(1904年, Park 1904=1972)。帰国後、コンゴでの過酷なベルギー人の支配や、アフリカ系の人々の窮状についての論説を執筆する社会評論家となり、アフリカ系の人々のための人権啓発運動をタスキーギ学園という施設でおこなっていたブッカー・ワシントンの秘書、ゴースト・ライターとなって、彼のヨーロッパ旅行記を執筆する(1905-1914年, Lyman 1992; Washington 1912)。そしてアフリカ系の人々にかかわる会議に出席していたウィリアム・トマスに出会い、シカゴに着任するよう誘われた²。トマスは協力者のポーランド人哲学者のズナニエツキと、社会解体論やパーソナリティ論を盛りこんだ大作モノグラフ『ポーランド農民』(Thomas & Znaniecki [1918-20] 1974)を出版している途中、女性関係のスカンダルにまきこまれて辞職する。彼の抜けたあとの学生指導をバージェスとパークが引きうけて、初期シカゴ学派の特徴的な著作の多くにかかわり、二人が協力しての指導が軌道に乗りはじめた1920年ごろから、1935年にパークがシカゴの地を離れるまでが、シカゴ学派社会学の黄金時代と呼ばれている³。その後の社会学は、コロンビア、ハーバード、カリフォルニアなどの伝統的名門校にも拡散し、社会調査の運動も継続され、シカゴ大学はその一角として米国社会学の隆盛の一翼を担うことになる(鎌田 2008)。

パーク中心に叙述される従来の学説史のなかで、バージェスの役割はどんなものだったのかを検討すべく、論者は2次文献の整理を終え、彼の博士論文(Burgess 1916)や30歳でシカゴ大学に着任するまえの、いわば研究者としての修行時代に作成されたソーシャル・サーベイの報告書などを時間をかけて読みこみ、解釈してきた(鎌田・中野 2003 など; 鎌田 2016, 2018, 2018a, 2019)。また、シンボリック・インタラクショニズムの重要文献として、バージェスがかかわった『コロバスのプールルーム』をはじめとする3つのサーベイ報告書も、今後、検討されていくべきだと思われる(University of Kansas, Department of Sociology 1915, 1917; CPC 1916= 2020)。ちなみに「プールルーム」は、日本でビリヤード場と呼んでいるものと同じである。多様な遊び方があるうち、高校生のような若者にも分かりやすいプールボールという遊び方をする場所という意味になる。さらにシカゴ・モノグラフのうちでも、その執筆の経緯について比較的詳しく書きのこしている『ホーボー』(Anderson 1923=1999-2000)の著者ネルス・アンダーソンとバージェス自身の回想から、その指導の一側面を取りだして検討する。

2. バージェスの「職業社会学」的関心、そして逸脱社会のキー・パーソンへの関心

本論で指摘するバージェスの研究指導の変遷の過程に、彼の「職業社会学」的関心の萌芽が観察されると論者は考えており、現時点でそれについて知りうる事象を時系列で並べなおす。

まず、1913年には、シカゴ大学でバージェスに博士号が授与された。博士論文の公刊時期は1916年ではあるものの、以下に検討する3件の文献のなかでその博士論文が最も早い時期の産物といえるだろう。そして1915年から1917年に公刊されるソーシャル・サーベイを、カンザス、オハイオ州の3大学の新任教員として手掛け⁴、シカゴに着任して、1923年に報告書が公刊されるアンダーソンの研究プロジェクトを指導するという順番になる。

a. 博士論文『社会進化における社会化の機能』

バージェスの博士論文では、その要旨が本文中のどこにも要約されておらず、表題の「社会化」の定義も、論文の冒頭ではほとんど何の意味も分からないほど茫洋としている⁵。論者はこの論文全体の論旨の分かりにくさを、初期シカゴ学派の文献全体と同様、時代背景が参照できなくなっているためにオリジナルの文意が判明しにくい現象と捉えて、極力、同時代の文献や本文で参照されている文献に目を通すことで再解釈してきた(鎌田 2016, 2018, 2018a, 2019)。バージェス自身の生涯のテーマは統計調査によって開発、確立された測定法や指標を新たな知的中核として、専門知識を使いこなす専門職を社会学の周辺領域に立ちあげ、社会学の影響圏内にある専門職を増やして大学院生を送りこんでいくことだったと論者は考えている。具体的には刑務所、少年刑務所での仮釈放の成否の評価にかかわる尺度を使いこなす仮釈放に関する調査員(parole officer)や、結婚や婚約の成否にかかわる評価尺度を使いこなす結婚カウンセラーなどである。さらに最晩年に、active retirementの日々を送りながら取りくんだ老年学では、おそらく幸福度尺度をもちいた高齢者のキャリアカウンセラーのような職種を考えていたのではないかと推察するが、これは具体的な成果をもたらさないまま、バージェス自身が健康を害してシカゴの養老院へ入所し世を去った⁶(鎌田 2006)。

バージェス自身の言葉で博士論文の趣旨を要約すると、「検証され、蓄積された知識の活用」を通じて進展する社会進化や進歩への参加(Burgess 1916:184-192; 鎌田 2018:148)の提唱ということになる。バージェスはハーバート・クローリーというジャーナリスト、社会評論家の著作に言及しつつコメントを書きいれている。クローリーはいわゆるリベラルな立場から、アメリカ社会への批評的コメントを展開した人物で、政治学、歴史学において、近年でも再検討されている(Moore 2009)。

以下に引用する部分は、バージェスのその後の業績に照らしあわせて、論文全体の勘所になる部分と論者は判断している。文中に、クローリーの著作を踏まえた専門家(expert)という言葉がある⁷。それは企業経営者、銀行家などの経済専門家、政治家、官僚、法曹関係者などを指す。

最終的な分析において、前述[直前のBurgess 1916:185]の非難[民衆のあいだに知識を広めることは害悪だと見なし、排外主義や超自然的な病気の治療を提唱するなどの動向]は専門家と一般大衆(mass of people)のあいだに隔てがあるという点にまとめられる。確かにこの申し立ては全面的に否定されはしない。この裂け目は、まず一つに、専門家側が知的に超然としていることから来る裂け目であるだけでなく、相手を理解できないことから来るものでもあり、さらに⁸、専門家側での人々への軽蔑と、それに呼応しての大衆側での専門家の無関心さへの不信感から来る裂け目である(Croly 1909:138)。こうした指摘がなされた場合に、この告発はもっと深刻なものとなる。またこれまでのところ、その分離は[専門家と民衆のあいだの]共感に関するものであったため、困難は認知的と

いうよりも情動的な社会化という面にあった。しかし、問題が知的分離に関するものである限り、またはその結果、情動的にも区別の線引きがなされるといったものである限り、その点はここで考察されることになる。まず第一に、その区別は相対的なものに過ぎず、ある活動部門の専門家は、ほかの活動に関しては大衆とは分離されずその一部分をなしていることを、わたしたちは認識しなければならない。同時に、専門化が進行するにつれ専門家同士の協同に関する問題が生じるということも確かである。些末なまでの専門分化に対しては、救済措置として知識の全状態についての包括的な見解が用意されるべきである。(Burgess 1916:186)

上記の引用部分では、企業経営者や銀行家のような経済専門家、法曹関係者、政治家、官僚のような司法、立法、行政の3種の権力を行使する専門家に言及しながら、彼らが一般の人々とは距離があるように受けとられがちだと指摘している。イギリスでは行政に携わる官僚や政治家も専門職と呼ばれる傾向があるので、こうした専門家はその意味での専門職ではある。しかし、高度な専門知識や資格制度により独自の社会的地位を保ち、公益性のある事業を展開する比較的、独立性の高い職業というアメリカの専門職論の基準には当てはまらない。バージェスの博士論文の時点では、現在のような専門職の社会学は成立せず、アメリカでの代表的専門職となった医師に関して、細菌学などの知見をもちいつつ、病因を追求しそれに基づいて治療をおこなう現行の医療行為と同様の科学性を、確立していく時期であった。すなわち、弁護士や聖職者のような職業的威信ある地位に、医師は到達していなかったと思われる。とにかくこのバージェスの引用箇所、現状の専門職論の対象とは若干のずれがあるものの、それと同様の批判意識につながる職業社会学的視点の萌芽を見いだすことができる。

b. 『コロバスのプールルーム』での「店主」への注目

次に『コロバスのプールルーム』から「店主」(proprietor)に関する記述を抜粋し検討する⁹。高校生のあいだで流行するプールボールという競技が、指先を含む細やかな体の使い方と、弾いた玉の軌道を正確に読む高度な知性の働きを必要とする健全なスポーツあるいは罪のない娯楽なのか、それとも酒や賭博をきっかけとして、暗黒街や逸脱的世界への入り口となる有害な遊戯なのかをめぐる論争があったらしく、その問題について、事実に基づいた対策を考案する目的でなされたサーベイの報告書である。この問題意識自体が、ダンス学校の看板をかかげて運営されるタクシーダンス・ホールのあり方をめぐるそれと、よく似ている。『タクシーダンス・ホール』では、おのおのが研究者として羽ばたいていく当時の大学院生によるフィールド調査の結果を集約して、クレッシーを著者とする報告書となった(Cressey [1932] 1969=2017; Bulmer 1983)。

そうしたチームを組んでのフィールドワークが、すでに『プールルーム』サーベイでも実施され、フィールド調査者の報告書と、高校生から自由に見聞や意見を提出してもらったものがあわせて編集、考察されている。結果として、シカゴ・モノグラフのhuman documentと比べても遜色ないプールルームでの生活の、生々しい断片が記述されている。

この調査ではプールルームの店主たちの前歴までは問題にされないが、高校生に賭け事を勧め、自ら賭けの胴元になり、巡回する警察官の監視に見張りを立てて対抗するといった彼らの様々な行動が記録された¹⁰。

また、プールルームにいると向かいの酒場の店主がやってきて高校生を店に誘おうとするな

どの観察もある。酒場にプール台が併設された形態を含め、プールルームにいることで飲酒への道が開かれ、酒場にたむろする多種多様な人々との付き合いが促されるのかもしれない。

2年前にプール・ルームでプール式玉突きを覚えた17歳の若者(E290)は、自分の観察から以下のように書いている。「[バケツ賭けする連中(bucket gang)]がプール・ルームにたむろするのを許してはいけない。道を隔てた酒場の[店主]が入店して連中と顔みしりになるのを許してはいけない。」少年がプール・ルームを卒業して酒場に入学する道筋が、彼の陳述により明らかになるのではないだろうか。(CPC 1916:13=2020:36)

1920年から1933年まで施行された禁酒法制定前夜のこの時代に、未成年の学生の飲酒がかなり不道德な色彩を帯びて見られていたことはいまでもないだろう。店主に関する引用全般から、時代、地域、社会に認められた道徳性とは無関係に、利潤を求めて顧客を増やそうとし、賭博、飲酒など逸脱行動のきっかけになる行動を誘発しがちな存在として、プールルームや酒場の店主が捉えられている。店主たち自身の前歴はわからないものの、暗黒街のギャングやマフィアらとつながりがある人たちとして、遊び場に出入りするしろうとの若者や学生と、本格的な逸脱の世界の住人とを橋渡しする逸脱世界のキーパーソンとして、店主たちが警戒されていた雰囲気が伝ってくる。

おそらくはこうした「店主」たちに準ずる存在として、渡り労働者であるホーボーや、カバン一つに詰めこんだ商品見本とともに旅をするセールスマンのような、地域社会に拠点のない人たちが寝泊りするルーミングハウスの大家にも、バージェスの好奇心はかき立てられたに違いない。

c. 『ホーボー』の調査、執筆、そして公開

バージェスに関する2次文献の要約論文から、適宜、この論点について抜粋して傍証とする(鎌田・中野 2003:53-58)¹¹。その個所の直前では、アンダーソンが、シカゴ大学に入学しようとして大学説明会に来た場面があり、そこでは学部長のアルビオン・スモールに誘われて彼は社会学部の大学院生となり、ホーボー出身者も入所する養老院でのアルバイトを紹介されている。『ホーボー』として出版された報告書は、アンダーソンが担当すべくバージェスが調査予算を獲得したプロジェクトの成果である。いわゆるホーボーヘミヤに住みこんでデータを収集し、家具つき貸間であるルーミング・ハウスを拠点にするアンダーソンが、大家の態度について愚痴をこぼしたところ、そこから research question をバージェスが構成して、下記引用箇所(波線部分)に見るように大家の前歴、どのようにして下宿の秩序を保つか、下宿で人気のある人は誰かなど、大家を中心に見た貸間街や下宿屋の動態を浮き彫りにする着眼点が提示された(この部分はバージェスによる回想)。

N・アンダーソンが下宿のおばさんにはうんざりしたとこぼしていたのを思い出す。彼がホームレスの人たちを研究していた貸間地区で、彼に自分の生活史(life history)を話しかけてくるというのだ。わたしはこう言った、『おい、これは使えるぞ、君はそれを紙に書き留めておかなきゃ』。わたしは今でもこの文書を持っているが、ひどく生々しいものだ。貸間の大家には誰がなるのか？ 貸間の大家にとっての問題とは何か？ 誰が下宿の人気者なのか？ 貸間地区にはありがちな、無秩序へ向かう傾向に抗してどうやって貸間を秩序ある状態に保つのか？ この文書から、貸間地区ではどんな風に人生が送られてい

るのか、それも特に貸間の大家の立場から見るとどうなのか、洞察が得られる。その洞察は、かき集めた山のような統計資料から得られるよりも、ずっと多いはずだ。そこで生活史から手に入るものからも、もちろん、統計学者にもっと多くの設問を投げかけることができ、他の答えに到達できることもある。」(Burgess & Bogue 1964a:9)¹²

このとき、アンダーソンの報告書はバージェスにより保管された¹³。おそらくドヤ街(lodging-house)に関する資料も、ほかの学生の学期レポートなどと一緒に『ホーボー』のみならず、『ゴールド・コーストとスラム』の貸間街に関する human document の前提知識となり、後続のモノグラフでの調査を促しただろう¹⁴。アンダーソンが回想しているパークとのやり取りを見ると、『ホーボー』というタイトルは、新聞記事に「ホーボーヘミヤ」という町の通称が提案されていたことに触発されて、パークが命名したようである¹⁵。『ホーボー』巻末の政策提言はバージェスが起草して報告書に添付されたものが、そのまま『ホーボー』という著作にも収録されたものと分かる¹⁶。

こうしてアンダーソンの指導に関し、パークは報告書に編集を加え、書名を決めて出版企画をシカゴ大学出版局に提案し決定を促している。バージェスは調査過程でこまごまと research question を見いだして調査に広がりを持たせ、集まった調査報告書をアンダーソンのプロジェクトだけでなく、ほかの大学院生の調査プロジェクトにも、柔軟に流用させる全調査の総合事務局長といった役回りで臨んでいる。そうした態度はアンダーソンの『ホーボー』を皮切りに出版されていくシカゴ社会学研究叢書の、モノグラフ群の指導ではじめて編みだしたのではなく、バージェスが大学院を出てオハイオ、カンザス州の三つの大学を転々としながら三つのサーベイを実施し、フィールド調査者から上がってきたデータや、調査対象者が調査票に書きこんだ自由解答欄を丁寧に読みとき編集するといった経験から、自然に身についたものではないかと論者は考えている。

3. 推測——初期シカゴ学派からヒューズの職業社会学、都市エスノグラフィへ

こうして3種の文献を並べ、バージェスの研究経歴全体と比較してみると、いくつかの指摘が可能だろう。バージェスの関心は以下のように変遷したと、論者は推測する。

1, 博士論文(Burgess 1916)でリベラルで社会主義的傾向のある社会批評家の見解を参照し、専門家批判の視点を考察に取りいれている。このころ、リベラルな社会評論家の著作から経営者や法曹関係者などの「専門家」の役割への批判的視線を摂取し、知識を開発しそれを応用することにより人々(民衆)に奉仕する専門職の立ちあげに志していた¹⁷。

2, 『プールルーム』サーベイ(CPC 1916)で調査者、学生たちの店主たちに関するコメントを拾い出して検討している。そこでの高校生たちのコメントから、バージェスの関心もプールルームの店主たちへと向けられた。または、バージェス自身のなかにもともと遊戯産業における経営者への興味があったのかもしれない。

3, 『ホーボー』(Anderson 1923=1999-2000)での研究指導で、家具つき貸間や下宿の大家のあり方や、ドヤ街でのまかないの食卓などでの宿泊者同志の交流に注目して、調査者アンダーソンの報告を促している。その調査は、かなり自伝的で、行きずりのインフォーマントからの

非形式的な問はず語りのインタビュー・データを編集したものである。報告書の作成において、Hobohemia の下宿の大家の経歴はどんなものなのかと「世間知らずな問いかけ」を投げかけ、渡り労働者が滞在する下宿屋という特殊な業務に従事する職業人への興味を促進した。

『ホーボー』はシカゴ大学社会学叢書の一冊だが、現在、シカゴ・モノグラフと呼ばれる出版物の最初の著作であり、出発点と見なされるので、この家具つき貸間やドヤ街の大家さんを中核とした宿泊者相互のコミュニケーション、相互作用に注目してデータを集めようとする視点は、逸脱行動や犯罪のキーパーソンとしてのそうした業者や商人への関心となって、黄金期のモノグラフ全体に引きつがれたのではないかと推測できる¹⁸。

上記の点に観察された傾向は、シカゴ学派においてヒューズが進めた職業社会学としての都市エスノグラフィに引きつがれ、発展したように見える。とはいえ、本論で提示した3件の文献の解釈は、それらを他の証拠と組み合わせると別の結論を導く可能性を排除するものではないことは確認しておきたい。

4. その後のパークとバージェス

最後に、明らかになっている限り、黄金期以降のパークとバージェスの経歴と業績を対比して結びとする。

70歳を超えシカゴを離れたパークは、最晩年の日々を、アトランタのフィスク大学で学長となったチャールズ・ジョンソンのもとで、客員教授として過ごした¹⁹。したがってシカゴ時代以降の活動は、シカゴ学派への貢献とみなすことはできないが、たとえばパークの人種関係論を敷衍してハワイで展開した研究者の著書に、彼は序文を寄せている (Park 1937; Adams 1937)。この著作はパークがシカゴを離れてから出版され、彼の研究指導の経歴の一部として、その人種関係サイクル論の意義を認める者には見のがせないものだろう²⁰。

パークがシカゴを去ると間もなく、彼がシカゴに来た時と同じ年齢である50歳をバージェスも迎えることになる。その後、30年、バージェスのシカゴでの活動はつづくが、その内容は社会学者なら誰もが知っているようであり意外に詳細は知られていない。

バージェスは世界で最初に、授業で家族社会学を講じ²¹、その分野を立ちあげた人物でもある。1940年代以降、教科書『家族』を執筆、改訂しつづけ、その実質的内容として結婚と婚約の成否の予測尺度の研究に従事する (Burgess & Locke [1945] 1953; 鎌田 2010)。ライフワークとなるはずの家族社会学の成果は、アドラー派の精神科医たちの反発で不発に終わり、質的研究と量的研究を融合させるような調査技法の検証プロジェクトには、バージェス自身の論理的思考に不備もあり挫折する²²。量的研究の方法論はラザースフェルドを中心に開発され、現在に至る量的調査の健在ぶりはいうまでもない。質的調査法はハワード・ベッカーやアンセルム・ストラウスによって探求され、分析的帰納法やグラウンデッド・セオリーとして洗練されていった (鎌田 2008, 2019)。

質的研究史の重要な要素としては、ハーバート・ブルーマーの理論的、批評的活動、エヴェレット・ヒューズの職業社会学を中心にした実証的な調査の指導が知られている (Blumer [1969] 1986=1991; Hughes 1958)。ヒューズが大学院生として博士号を取得したシカゴ不動産協会のモノグラフ (Hughes [1931] 1979) は、フィールド調査よりもむしろ歴史的文書の分析に基づくアーカイブ調査である²³。またパークが、バージェスをパートナーとするまえに研究指導したジェシー・スタイナーの日系人社会の研究は、やはり報道資料などをまとめたジャーナリスト的なアーカイブ調査である (Steiner 1917=2006)。そうしたパーク、ヒューズら、バー

ジェス以外の指導者の調査実績や指導の成果を見る限り、シカゴ市に住む多様な人々の多面的調査記録にフィールドワークの要素を持ちこみ、複数の大学院生が調査担当者として現地に入り、多様な視点から集めたデータを集約して解釈するというシカゴ・モノグラフのスタイルを決定したのも、調査を遂行するうえでは強力なハブとなり、事務局長の役割を果たしたバージェスだと考えられる。

初期シカゴ学派の黄金時代を支えた中心的指導者と、バージェスを見なしてよい理由が、ここでも見いだせたのではないかと思われる。

まとめ

バージェスはシカゴ大学での博士号取得論文で、リベラルなジャーナリスト、クローリーの著作に触れつつ専門家批判の議論を紹介し、著作全体の主張として「検証され、蓄積された知識の活用」を通じて進展する社会進化や進歩への参加を提唱し、それは彼の研究経歴を通じて、社会的に吟味された専門知識に基づく専門職の創設と育成という行動方針として、読みかえられていく。シカゴ大学で学んだ新任社会学教員として、オハイオ州コロンバスにおいて実施されたプールルームに関するソーシャル・サーベイの報告書では、フィールドワーカーの報告や調査票に記入された高校生の自由回答欄から、「店主」の行動に注目するコメントを、多数、報告書に引用している。これは賭博、飲酒をきっかけとしてギャングやマフィアが暗躍する夜の街へと若者や学生を誘惑するキーパーソンとなりうる人物として、「店主」たちが警戒されていた雰囲気記録するものだろう。さらにシカゴ・モノグラフの最初の著作となったアンダーソンの『ホーボー』執筆のプロジェクトにおいて、バージェスはアンダーソンの定期報告に混ざる愚痴から、家具つき下宿やドヤ街の大家の行動に関心をかき立てられ、特に research question を設定してアンダーソンに報告書を提出させ、ほかのモノグラフにも活用できる質的データのストックの一部を形成した。本論では、こうした彼の関心を一般化して、逸脱、非行、犯罪に関する諸行動におけるキーパーソンへの興味と捉える。こうした興味が発展していく過程で、のちにヒューズの研究指導においても特筆される多様な職業の研究へと、大学院生たちを水路づける研究の土壌が知らず識らずのうちに作られていったのではないか。もちろん、本論で提示したバージェス著作の一側面は、他の側面と合わせて、別の推論を導く解釈にも開かれている。その点は留保しつつも、本論では、バージェスの学生指導における特性が職業の社会学の萌芽を示しており、シカゴ大学における質的研究を動機づける土壌を形成したのではないかという仮説を形成した。

注

- 1 本稿ではパークの伝記資料として Raushenbush (1979) などを活用している。
- 2 シカゴ大学で 1914 年に講師 (lecturer), 1923 年に教授, 1935 年に名誉教授となる。パークの経歴は *Who Was Who in America*, V.2 (1950:413); 鎌田 (1997:82-83) を参照。
- 3 パーク自身の著作としては、移民新聞研究 (Park 1922) がある。トマスから引きついで西海岸での日系人調査では人種関係尺度作成を指導した (Bogardus 1933 など)。
- 4 シカゴ大学に戻るまでのバージェスの赴任先、身分 (着任年次) は以下の通り。オハイオ州のトリード大学で助教 (Instructor, 1912-1913), カンザス大学で講師 (Assistant Professor, 1913-1915), オハイオ州立大学で講師 (1915-1916)。(*Who Was Who in America*, V.4, 1968: 137; 鎌田 1997:82)。
- 5 「集団 (group) の視点からは、集合での活動 (collective activities) への個体 (individual) の心の分節化 (psychic articulation) と、わたしたちは [社会化] を定義してもよい。個人 (person) の視点からは、集団の精神

と目的、知識と方法、意志決定と行為に個体が参加することである。」(Burgess 1916:2; 鎌田 2018:145) 本論での [] 内は、引用者が文意明確化のために補った部分である。

- 6 シカゴ・モノグラフの著者でもあるルース・キャバンがバージェスの老年学プロジェクトにも参加していた模様である (Cavan 1962)。
- 7 引用文中の「専門家」という表現のいくつかは、訳文作成の際、文意明確化のために補ったものである。
- 8 Croly の参照注は、バージェスの本文ではここに挿入されているが、引用訳文の体裁上、文末に移動させた。出典指示の形式も文脈に合わせて変更し、注を一つ省略した。
- 9 コロンバスという地名はアメリカに、複数、存在する。論者の居住地で、コロナ禍で映画館が閉まる直前に上映されていた『コロンバス』(2017年製作、ゴゴナダ監督)というタイトルの映画があったが、それは南部のインディアナ州のモダニズム建築で有名な町を舞台としている。こちら、オハイオ州のコロンバスは、やはり映画でいうと、第一波のコロナ禍が収束し、映画館が開いてすぐに上映された『SKIN / スキン』(2019年製作、ガイ・ナティープ監督)という映画で、ネオナチの人種差別的な活動家の溜まり場が描写されていた町である。もちろんバージェスがいたところには政党としてのナチスはまだない。
- 10 店主が言及されているケースを列挙する。かなり多いが、これですべてでもない。本論の引用文における強調はすべて引用者による。

訪問された 243 会場のうちで、賭け事が報告されたのは 101 である。表だって賭け事がなされていない場所の数は、おそらく片手の指で数えられる程度だろう。カーター警察署長がわたしに語ったところでは、部下たちが賭け事を見張らなければならない場所の割合は 100% だそうだ。プール・ホールの調査担当者の証言によると、店主たちは賭け事を黙認し、しばしば奨励もしている。

以下の 3 例は、引用してもよい多くの証言のごく一部である。

2月6日。日曜の夜、午後11時にプール・ルーム (X4) に入った。「賭け事厳禁」という表示の下で、25歳くらいの3人の若者がニギリのプール式ビリヤードで遊んでいた (playing pool on pay balls)。店主は脇に立っていて、1ゲームごとに壺からじゃらじゃらと10セント硬貨を取りだしていた。ゲーム中、誰が勝っているんだと一人が尋ねたところ、「こいつは、おれが勝つゲームさ」と店主は言った。店が閉まる11時45分に、若者の一人は25セント浮き、もう一人は25セント沈み、3番目のものは4ドル近くも失っていた。店主は正しかった。彼の一人勝ちだった。見物は3人から5人と多様だった。

署名者 E

4月23日。日曜の夜、午後10時20分にプール・ルーム (X1) に入った。第1の台では、おそらく18歳未満の二人の少年が、第2の台では、その一人が店主である25歳から30歳の3人の男がプール式ビリヤードで遊んでいた。

入っていくと、第2の台にいた男たちは疑わしげにわたしを眺めあげたが、2度目の視線を浴びることなく手洗い場へとわたしは通りぬけた。1分後に出てきて、第2のゲームの見物人であるほかの3人と一緒に、注意を引くことなく席を取った。3人の男は死んだ玉に10セント、活きた玉に25セント賭けて、ピープール (pea-pool) をやっていた。そのうちの一人がつづげざまに負けていたらしかった。新たにゲームがはじまった所で、突然「サツ (the cop)」が巡回で入ってきて、ピープールのゲームは罪のない回し打ちのプール式ビリヤード (rotation pool) に変わった。警官がとどまっているあいだ、回し打ちのゲームが続いたが、彼がいなくなった途端に、ピープールのゲームが再開された。しかし、それも男たちの一人がドアまで行き、警官がドア近くにぶらついていないことを確かめたあとのことであった。午後11時30分過ぎてすぐにわたしは立ちさった。

署名者 A

土曜の夜10時30分。一番台数の多いプール・ホールの一つで、店の支配人と中年の客が部屋の奥にある台でさいころ賭博をはじめた。二人は調査担当者もゲームに誘おうとするが、失敗する。彼らはどうとう3人の若者を博打に参加させることに成功する。それぞれのゲームの掛け金は各参加者あたり25セントだった。かなりの額の金の持ち主が変わったが、それも台についていた連中 (table men) の一人がやっ

てきて「支配人」にこうささやくまでのことだった。「曲がり角のところにいる「サツ」がおれたちを見つめてるぜ」と。男たちはもう1回さいころを振って、その晩のゲームは終了した。

署名者 W (CPC 1916:7=2020:27)

第1の問いに答えた538人の少年たちのうち、199人だけは「店主」に年齢を聞かれたことがあると答えたのに対し、339人は一度も年齢を尋ねられなかったと述べた。第2の問いに肯定的か否定的な答えをした525人のうち、95人だけがプール・ルームを出るよう頼まれたことがあると告白し、430人はその要請は一度もされることがないと述べた。一人の少年は出るよう頼まれたが、そのまま店にいたと言う。18歳の別の少年(B503)は、年齢制限に従って法が施行されることを要求するが、「「店主」たちは少年たちの小銭がほしいので、決して年齢について問いかけはしない」と述べている。(CPC 1916:12=2020:33-34)

ビリヤードで遊ばないが、何軒ものビリヤード場に出むいたことがある21歳の若者(D441)は、こう書いている。「たいていの部屋の雰囲気は誰の性格もだめにしてしまいます。「店主」たちもそのことは認めるでしょう。もし自尊心のかけらでも持っていれば。(CPC 1916:13=2020:36) [……] (引用原典の同ページ内の中略を示す)

プール式の遊び方を知っている別の19歳の若者(C191)はその友人たちのほとんどよりも、うわべの裏側を深くうがった考えを持っている。彼が言うには、「プール・ルームの厄介ごとは「店主」のせいでは生じていると思います。全然、彼らは厳格でなく、悪さを奨励する人さえいます。「店主」が良ければ、プール・ルームも良いのです。」(CPC 1916:13=2020:36) [……]

プール式で遊ぶがプール・ルームでは遊ばない16歳(B459):「わたしの意見では、プール・ルームにかかわる法律が執行されて18歳未満の少年たちに入店させず、少年たちが金をかけて遊ぶことを許容しないのであれば、現状のプール・ルームは大丈夫だ。どうやって少年たちの年齢を確認するのかという人もいるかもしれない。もし「店主」が少年たちに年齢を尋ねるなら、年齢に関して少年たちから署名を取らせればいい。」

ビリヤードで遊ばない18歳(B563):「わたしなら善良で道徳的なまたは宗教的な人を「店主」に推薦したい。平均的なビリヤード室の「店主」はお客が何をしようが気につけない乱暴な人である。」(CPC 1916:14=2020:37)

- 11 アンダーソン関連の引用文はすべてこの要約論文から抜粋しており、訳文の表記もほぼ同じである。
- 12 アンダーソン自身のバージェスの指導についての回想は以下の通り。「彼は[文書に]目を通すと、時々、世間知らずに思える質問をしたものだ。何の指導も受けてないようにも思ったが、指導は、世間知らずな質問のなかに隠されていたのだった。」(Anderson 1975:166)
- 13 アンダーソンの証言は以下の通り。「バージェスにわたしは完成した報告書を提出できたが、彼は[受けとったあと]自分でどこかに分類しファイルした文書を[アンダーソンに返すのではなく]全部、手元にとっておきたいと言った。その後、わたしはそれがイリノイ大学のシカゴ分校に保管されていることを知った。」(Anderson 1975:166)
- 14 『ホーボー』のドヤ街の記事は、『ゴールドコーストとスラム』の貸間街やタワータウンの記述を促し、家具つき貸間の住民である家出少女「ふしだら娘(charity girl)」の生活史が、『タクシーダンス・ホール』のダンサーたちの生活史のサイクルの調査を促したといった関連づけにより、複数のモノグラフ間に張りめぐらされたresearch questionの糸が、シカゴ・モノグラフを一体として結びつけるintertextualityの枢軸として読解の鍵となる (Anderson 1923:27-39=1999-2000:上, 48-67; Zorbaugh [1929] 1976: 69-104=1997: 79-123; Cressey [1932] 1969=2017)。ただし、『ゴールドコーストとスラム』で実際に引用されている『ホーボー』のデータは、スラムにおけるテキヤ、物売り、街頭演説などに関する部分である (Anderson 1923: 9, 10, 40-60=1999-2000: 上, 23-25, 68-90; Zorbaugh [1929] 1976: 111, n.1, 115= 1997:133-134, 145, n.7)。本論ではモノグラフに関する訳語は必ずしも刊された邦訳にはしたがっていない。
- 15 「報告書がもし委員会で受理されたなら、おおかた、私設の福祉事業所である、慈善協会か何かの社会福

社事業の計画として使われるだろうと、わたしは期待していた。バージェスに渡しはしたものの、誰も一部分たりとも目を通してはなかったので、安心した気分にはなれずにいた。不安な何日かを過ごしたあとに、研究室に出むくとバージェスは微笑みながら出むかえてくれた。50ページほど読んだところで、たぶん、パークにコメントしてみたところ、5フィートばかり離れたところに机を構える、この老先生の関心を捉えたのだろう。バージェスは吉報を伝える人のように、にこにこしていた。原稿はパーク教授が手元においていると、彼は説明した。

パークは振りむいて何かほめるようなことを言った。たいそうにほめたわけではないが、彼としてはたいそうにほめた方だ。何より値打ちがあったのはその声の調子で、わたしは気分よくなった。『気にしないでくれるとうれしいが』と口を切り、こことここで、言葉を入れかえたとか、時々、鉛筆で助言を書き入れたとか語りつづけた。そして付け加えて、もうシカゴ大学出版局にも顔を出してきたので、『準備でき次第、出版されることになる』と言った。

『でもこれは本にするつもりで書いたわけじゃありませんよ』とわたしは抗弁した。『これは単に委員会に提出する報告書なんですけれども。』

彼はバージェスと微笑を交わした。さあ片づけちまおうというような感じで、パークは自分で直した変更部分の説明をした。まず最初に、H・M・ビアズリー（Harry M. Beardsley）が書いたシカゴ・デイリー新聞（Chicago Daily News）の1917年3月20日の記事から取った引用について説明した。彼はウェスト・マディソン地区について、ホーボーとその特別な文化と同じくらいよく知っていると述べている。それは普通のメイン・ステム（Main Stem）以上の場所なので、「ホーボーヘミア」というのがもっとふさわしい呼び名ではないかと提唱している。このことでタイトルが『ホーボー』になるということをはのめかしていたのかもしれない。わたしには本が出るまでわからなかったことだが、自分のタイトルは『シカゴのホームレスの人々』とかそんなもんだった。それは、ソーシャル・ワーカーたちのホーボーヘミアの人たちすべてへの呼び名だった。

およそ1時間で、わたしたちは何百ページかについて検討し終わった。わたしのよりもいい言葉で、彼はそこかしこ書きかえた。変更した点のほとんどは段落のなかでの文の順番の入れかえだったと思う。あまり何も伝えていない文は削除したかもしれない。段落全体を削除したところはなかったと思うが、ページのなかでの段落の順番を変える必要はあった。特にわたしの気分をよくさせたのは、段落、節、章の内容にはパークが何の疑問もさしはさまなかったことだった。

わたしはほとんど一晩中、タイプライターに向かい、終夜営業の食堂でコーヒーとロールパンのセットをたまに食べに行くとき以外、打つのをやめなかった。翌日の昼まえには、他の仕事をあと回しにしてくれているバージェスのところに行った。この仕事は出版局のために済ませてしまわねばならないことだった。わたしはだんだんバージェスの細部への気のきいた目配りに感心し始めた。副題を吟味し、句読点、綴りや他の間違いに気を配り、脚注をつけていくなどのことだ。こんなことが5、6日続き、原稿は出版局へ回された。何週間かたつと、今度はページごとの校正刷りを読む仕事と索引作りの業務が回ってきた。著者が序文を書くことなど思いも及ばなかった。本にはパークによる編者の序と委員会の序文がついていたからだ。（Anderson 1975:168-169）

- 16 アンダーソンの回想によると、「報告書はシカゴのホームレスの人々に対処する計画の基礎となるはずだった。バージェスが委員長で、公設、私設の事業所を代表する14人委員会ではバージェスに諸発見の要約と政策提言（recommendations）を準備するよう委任し、それが本の付論になった。」（Anderson 1975:169）
- 17 “Social Survey” 論文（Burgess 1916a:499）では、「ソーシャル・サーベイは民主主義の学校」と解釈できる文言がある。
- 18 犯罪、非行、売春など、社会改革やソーシャル・サーベイの関心の的となった社会現象、社会問題への注目が、シカゴ・モノグラフにも引きつがれていることは言うまでもない（Landesco [1929] 1968; Thrasher [1927] 1963; Reckless [1933] 1969）。
- 19 ジョンソンとパークには、シカゴ市での人種暴動を受けたアフリカ系の人々の暮らしぶりのサーベイである『シカゴの黒人』に取りくんだころ以来の結びつきがある（Chicago Commission on Race Relations

- 1922; Gilpin & Gasman 2003; 鎌田 2009)。
- 20 パークの人種関係論全般に関しては、Lyman (1990), 鎌田 (2007) も参照。『科学としての社会学入門』(Park & Burgess [1921] 1924) での競争、闘争、応化、同化という人種関係サイクルは、実証的モデルというよりも理念型であり、太平洋岸の日系人調査などでの実証的な適用機会にも活用されていない。
- 21 シカゴ大学で「家族」(The Family) というタイトルの授業が開講されたのは1913-1950年 (Harvey 1987:256, 265)。ただし、それを最初に開講したのはチャールズ・ヘンダーソンであり、彼が1915年に急死するので、1916年からバージェスが引きつぎ、1925年以降はバージェス以外にも多様な教員が担当している。1915年の担当者は不明となっている。したがって、バージェスが世界で最初に「家族」という授業を講じたわけではないが、その内容に家族社会学を導入したのは、確かに彼が最初かもしれない。
- 22 バージェスの統計調査に関する諸経緯については、2010年5月30日「予測研究の予期せざる結果——アーネスト・W・バージェスの予測研究をめぐって」第61回関西社会学会研究報告II「社会調査法・社会移動」(於 名古屋市立大学) において報告した。
- 23 ヒューズはシカゴ大学で1928年に博士号を取得、同大学に教員として在職したのは1938-1961年 (Harvey 1987:224-225, 286)。

参考文献

- Adams, Romanzo, 1937, *Interracial Marriage in Hawaii: A Study of the Mutually Conditioned Processes of Acculturation and Amalgamation*, New York: Macmillan.
- Anderson, Nels, 1923, *The Hobo: The Sociology of the Homeless Man*, Chicago: University of Chicago Press.
(=1999-2000, 広田康生訳, 『ホーボー——ホームレスの人たちの社会学』上, 下, ハーベスト社.)
- 1975, *The American Hobo: An Autobiography*. Leiden, Netherland: E.J. Brill.
- Blumer, Herbert, [1969] 1986, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Berkeley: University of California Press. (=1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論——パースペクティヴと方法』勁草書房.)
- Bogardus, Emory S., 1933, "A Social Distance Scale," *Sociology and Social Research*, 17:265-271.
- Bulmer, Martin, 1983, "The Methodology of The Taxi-Dance Hall: An Early Account of Chicago Ethnography from the 1920s," *Urban Life*, 12:95-101.
- Burgess, E.W., 1915, "The Social Survey Exhibit." *Kansas Municipalities*, 1 (Sep.) :3-6.
- 1916, *The Function of Socialization in Social Evolution*, Chicago: University of Chicago Press.
- 1916a, "Social Survey: A Field for Constructive Service by Departments of Sociology," *American Journal of Sociology*, 21:492-500.
- 1916b, "Juvenile Delinquency in a Small City," *Journal of Criminal Law*, 6: 724-728.
- Burgess, Ernest W. and Donald J. Bogue (Eds.), 1964, *Contributions to Urban Sociology*, Chicago: University of Chicago Press.
- , ——— 1964a. "Research in Urban Society: A Long View." Burgess, Bogue, 1964:1-14.
- Burgess, Ernest W. and Harvey J. Locke, [1945] 1953, *The Family: From Institution to Companionship*, 2nd ed., New York: American Book Company.
- Cavan, Ruth Shonle, 1962, "Self and Role in Adjustment during Old Age," Arnold M. Rose, ed., *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston: Houghton Mifflin, 526-536.
- Chicago Commission on Race Relations, 1922, *The Negro in Chicago: A Study of Race Relations and a Race Riot*, Chicago: University of Chicago Press.
- CPC (Central Philanthropic Council.本文中では略称で表記する), Survey Committee, 1916, *Columbus Pool Rooms: A Study of Pool Halls, Their Uses by High School Boys, and a Summary of Public Billiard and Pool Room Regulations of the Largest Cities in the United States. Report of the Survey Committee*, (chairman, E.W. Burgess), Columbus, Ohio: Central Philanthropic Council. (= 2020, 鎌田大資・桑原司訳, 「コロナバスのプール・ルー

- ム (シンボリック相互作用論基本文献翻訳シリーズ)』『経済学論集』(鹿児島大学) 94:19-44.
- Cressey, Paul G., [1932] 1969, *The Taxi-Dance Hall: A Sociological Study in Commercialized Recreation and City Life*, Patterson Smith. (= 2017, 桑原司・石沢真貴・寺岡伸悟・高橋早苗・奥田憲昭・和泉浩訳, 『タクシーダンス・ホール——商業的娯楽と都市生活に関する社会学的研究』ハーベスト社.)
- Croly, Herbert David, 1909, *The Promise of American Life*, New York: MacMillan.
- Gilpin, Patrick J., and Marybeth Gasman, 2003, *Charles S. Johnson: Leadership beyond the Veil in the Age of Jim Crow*, New York: State University of New York.
- Harvey, Lee, 1987, *Myths of the Chicago School of Sociology*, Aldershot, Hants, England: Avebury.
- Hughes, Everett Cherrington, 1958, *Men and Their Work*, Glencoe, Ill.: Free Press
- [1931] 1979, *The Growth of an Institution: The Chicago Real Estate Board*, Chicago: Arno Press.
- 鎌田大資, 1997, 「A J S から見たシカゴ学派の社会学者——人生の舞台としての学術誌」, 宝月誠・中野正大編, 『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣, 65-94.
- 2006, 「バージェスの晩年と終焉——その位置づけの困難さをめぐって」中野正大 (研究代表者) 『現代社会におけるシカゴ学派社会学の応用可能性』平成 14-17 年度科学研究費補助金 [基盤研究 (B)] 課題番号 14310079 研究成果報告書 :27-43.
- 2007, 「シカゴ学派社会学の揺籃期——ドイツ闘争の社会学の移入と移民周期説」『椋山女学園大学研究論集』38 (社会科学篇) :71-83.
- 2008 「アメリカ社会学史における量的調査と質的調査——初期シカゴ学派およびアーネスト・W・バージェスの軌跡が照射するもの」『フォーラム現代社会学』7:113-24. (関西社会学会)
- 2009 「初期シカゴ学派人種関係論の諸相——パークからジョンソン, フレイジャーへ」『社会学史研究』31:51-65. (日本社会学史学会)
- 2010 「分水嶺としてのバージェス——家族社会学とシンボリック・インタラクショニズムの交点」『人間関係学研究』8:17-30. (椋山女学園大学)
- 2016 「形成期のアーネスト・バージェスを解読する——序説」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 47:1-15.
- 2018, 「アーネスト・バージェス博士論文における社会化研究——シンボリック・インタラクショニズムの祖型として社会的世界論を読みこむ」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 49:143-160.
- 2018a, 「メソディズムと労働組合運動の社会的世界論——アーネスト・バージェスの博士論文に学ぶ」『人間関係学研究』15:11-25. (椋山女学園大学)
- 2019, 「20 世紀社会学と社会調査の発生史——社会的世界論をもちいた初期シカゴ学派社会学研究要約と図解」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 50:79-96.
- 中野正大, 2003, 「初期シカゴ学派社会学の確立——E・W・バージェスの人と作品」『人文』(京都工芸繊維大学工学部) 51:23-75.
- Landesco, John, [1929] 1968, *Organized Crime in Chicago: Part III of the Illinois Crime Survey*, 1929, Chicago: University of Chicago Press.
- Lyman, Stanford M. 1990. "The Race Relations Cycle of Robert E. Park," *Civilization: Contents, Discontents, Malcontents, and Other Essays in Social Theory*, Fayetteville: University of Arkansas Press, 127-135.
- (ed.) 1992, *Militarism, Imperialism, and Racial Accommodation: An Analysis and Interpretation of the Early Writings of Robert E. Park*, Fayetteville: University of Arkansas Press.
- Moore, John Allphin, Jr. (ed.), 2009, *Herbert Croly's The Promise of American Life at Its Centenary*, Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing.
- Park, Robert Ezra, 1904, *Masse und Publikum: eine methodologische und soziologische Untersuchung*, Bern: Buchdruckerei Lack & Grunau. (=1972, ed., Henry Elsner, tr., Charlotte Elsner, *The Crowd and the Public and Other Essays*, Chicago: University of Chicago Press, 1-81.)
- 1922, *The Immigrant Press and Its Control*, New York: Harper.

- 1937, "Introduction," Adams 1937:vii-xiv, (改題して再録。"The Race Relations Cycle in Hawaii.")
 Park, Robert Ezra, [1950] 1964, *Race and Culture: Essays in the Sociology of Contemporary Man*, New York: Free Press, 189-195.)
- Park, Robert E. and Ernest W. Burgess, [1921] 1924, *Introduction to the Science of Sociology*, 2nd ed. Chicago: University of Chicago Press.
- Raushenbush, Winifred (Foreword, Epilogue, Everett C. Hughes), 1979, *Robert E. Park: Biography of a Sociologist*, Durham: Duke University Press.
- Reckless, Walter C., [1933] 1969, *Vice in Chicago*, Clairmont, New Jersey: Patterson Smith.
- Steiner, Jesse Frederick, 1917, *The Japanese Invasion: A Study in the Psychology of Interracial Contacts*, Chicago: A. C. McClurg. (=2006, 森岡清美訳, 『人種接触の社会心理学——日本人移民をめぐる』ハーベスト社.)
- Thomas, William Isaac and Florian Znaniecki, [1918-20] 1974, *The Polish Peasant in Europe and America*, V. 1, 2, New York: Octagon Books.
- Thrasher, Frederick M. (abr., intro., James F. Short, Jr.), [1927] 1963, *The Gang: A Study of 1,313 Gangs in Chicago*, Chicago: University of Chicago Press.
- University of Kansas, Department of Sociology, 1915, *Belleville Social Survey: A Study of Social Conditions in Belleville, Kansas, Made for the Purpose of Basing a Plan for Community Welfare upon a Knowledge of Community Problems* (director, F.W. Blackmar, social surveyor, E.W. Burgess), Laurence: Department of Sociology, University of Kansas.
- 1917, *Lawrence Social Survey* (director, F.W. Blackmar, field supervisor, E.W. Burgess), Laurence: Kansas State Printing Plant.
- Washington, Booker T. (Collaboration, Robert Ezra Park), 1912, *The Man Farthest Down: A Record of Observation and Study in Europe*, Garden City, New York: Doubleday, Page.
- Who Was Who in America*, 1950, V.2 (1943-1950), 1968, V.4 (1961-1968), Chicago: Marqui's Who's Who.
- Zorbaugh, Harvey Warren, [1929] 1976, *The Gold Coast and the Slum: A Sociological Study of Chicago's Near North Side*, Chicago: University of Chicago Press. (=1997, 吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社.)